

仏教専門学校

仏教専門学校(現仏教大学)
は京都の千本北大路にあつた。私が寄宿したのが、知恩院の山内にあつた維志学寮。本来はお寺の子弟が寄宿する

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
けん ろん かく え

⑨

所だが、私のころは京大の学生も寄宿していた。寮長は藤吉慈海さん。とても立派な方で、最後は鎌倉の光明寺の法主で亡くなりました。

知恩院は、いま京都の浄土宗の大パビリオンだ。その中に建築、庭園、美術一般がすべて入っている。庭園を

ねお茶に呼ばれることもあつた。このころ、日本の代表的な風景に間近に接し、私の人生に大きな影響を与えた。

学校には心にびたつとするものがなく、便便と日を送つた。そんな中で、私は絵を描くようになった。だから、スケッチブックは常に持っていて、講義の時に絵を描いてしかられたこともあつた。静物

「東京の美校」思い募る

寮に荷物残したまま上京

の写生が主だった。その時の同級生にいま浄土宗の宗務総長をしている水谷幸正さんがいる。私のことをよく覚えていてくれて何かと声をかけてくれる。水谷さんは、説教も上手で、人を元気づけるような説教をする。

寮から学校に通う途中に工業繊維学校(現京都工業繊維大学)があつた。そこでは図

と芸術は多少違つが、仏壇などに施された意匠とイメージが重なつたのである。だれかから「言はもともと東京だろう。それなら東京美術学校があるではないか」と言われ、東京の美校に行きたいという気持ちが高つていった。

それで、夏休みの前だったか、退学届けも出さず、荷物も寮に置いたまま上京した。その前に、母に「東京に行きたい」と相談したら、「二つ返事で「いいよ」と言った。母も心の中では東京に憧れていたのではないかと思う。

東京では中学校の同級生、田中和雄の家に昔のよしみで転がり込んだ。彼も焼け出され、日本女子大の裏に住んでいた。彼に相談して美校の調査を始めたが、学制が変わつて美校に入るには新制高校の

卒業資格が必要ことがわかつた。それで母校の五中(その時は五高)に行った。五高に籍は置いたが、広島と東京の間を行ったり来たりだった。広島では、私が僧衣を着てお経をあげなければいけなかつた。

知恩院の維志学寮を飛び出



えている。檀家さんの祥月命日で檀家さんがお布施を渡そうとするので、ろくなお経もあげられないのにと逃げるように文閲を出た。奥さんが追いかけてきて「これは私があげるのではなくて阿弥陀様が差し上げるものですから」と言つて、衣の中に入れてくれた。

お経をあげることは仏の心だ。お布施は仏様が私にしてくれたもの。だから、私は仏様の心を伝えるのだと思つた。そこで

したが、お寺を続けるならば、もう一度勉強しなければいけないと言われ、東京で浪人中に芝の増上寺で二月ほど特別講習を受け、京都の百万遍にある知恩寺で加行を受けて正式の僧侶になった。

初めてお布施の意味がわかつた。後に私は、デザイン料はお布施みたいなものだと言張するようになる。

若い坊さんは、新発意さんと呼ばれた。お布施を初めてもらった時のことを説明に覚

た。なお、八日付で書いた海兵針尾分校の防府移転は、昭和二十年(一九四五年)であつた。